

チャレンジガイドブック

佐賀県公式SNS

「さが山のひと棚田のひと」の公式ページはこちら

Facebook



instagram



中山間地域に関する情報を随時発信中! フォローをお願いします。

さが中山間通信

つながる挑戦、 耕す未来。



佐賀県 農山村課

〒840-8570 佐賀市城内1-1-59 TEL.0952-25-7115



つながる挑戦、 耕す未来。

中山間地域での挑戦は、ひとりで始めるものではありません。

新しい一歩を踏み出すことで、地域の人々とのつながりが生まれ、
そのつながりが未来を耕す力になります。

このガイドブックは、佐賀の中山間地域で新たに農業や事業、
地域活動に挑戦したい人に向けて、具体的な事例や実践者の声をまとめたものです。

どこから始めればいいのか？

どんな仲間と出会えるのか？

すでに挑戦を始めた人たちのリアルな経験と、つながりが生み出す可能性を
この一冊を通じて感じてください。

あなたの挑戦が、新たな未来を耕します。



01	大吉村	03
02	トウルーバファーム佐賀株式会社	05
03	株式会社九州アグリコール太良	07
04	フィールドアップITN.株式会社	09
05	農業法人ちぎりファーム	11
06	川内地区棚田保存会	13
07	川古集落営農組合	15
08	鍋野集落協定	17
09	株式会社エヴァ	19
10	金崎建設株式会社	21
11	NPO法人佐賀学生スーパーネット	23

「売り手」から「作り手」へ 百姓だからこそ広がる可能性



キッカケ

西日本の大型商業施設で、陶磁器の卸・販売を行っていた会社「はさみの大吉」が、コロナ禍を経て農業に参入。「売り手」から「作り手」への転換を目指したもので、会社の周辺に広がる不耕作地がきっかけに。20年以上放置された畑は、そのままでは水害で崩れる危険性があり、「だったら自分たちで耕して、安全で身体にやさしい野菜を作ろう!」、「大切な家族や仲間が集まれる場所を作ろう!」と、令和4年に減農薬の野菜づくりをスタート。参加共有型コミュニティビレッジ「大吉村」を設立しました。



組織概要

「日本一楽しい村を一緒に作りませんか?」がコンセプトの「大吉村」は、村人と呼ばれる会員が集う場所です。家族構成に応じた会費制になっていて、村人は田植えや稲刈りなどの体験や季節のイベントに参加でき、現地に来られない場合は大吉村で収穫された安心安全な野菜や棚田米が届けられます。現在の会員登録は250件ほどで、村人の数は子どもから大人まで600人以上。ちなみに、村の運営スタッフは陶磁器販売会社の元社員のため農業経験はゼロ。有機農業を実践する松本農園(吉野ヶ里町)に通って、農業のいろはを教わりました。



中山間地域での挑戦



つながり

自分たちのことを、農業従事者ではなく「百姓」だと語る松尾さん。米や野菜を作るだけの農業とは違い、食を中心とした活動にエンターテインメントの要素を取り入れて参加者の笑顔と元気を引き出しています。「子どもたちが楽しめるように企画したイベントも、大人の方が楽しんでいることが多い」。そのおかげで、大人の村人たちが曜日ごとに大吉村の農作業をサポートするなど自発的な活動も生まれました。豊かな自然と土に触れ、育てる大変さを知り、仲間と作業する楽しさを実感できたからこそこの好循環です。

耕す未来

大切な家族や友人に、自信を持って提供できる野菜や米づくりを基準にする大吉村。そんな百姓スタイルに共感する、「百姓」を育てる仕組みを作っていきたいと考えています。「平地の10倍の労力がかかると言われる棚田をトレーニングファームとして活用すれば、短期間で立派な百姓ができていくはず」と松尾さん。人間の暮らしの根っこにあるビジネスの一つが農業です。だからこそ、子どもや障がい者、教育やアートなどさまざまな分野と複合的につなげることで、農業を次のステージに広げたいと考えています。

松尾 光さん



● 岳の棚田(有田町)の不耕作地で米づくり

有田町の岳の棚田で農業を営む前田好弘さんとの出会いをきっかけに、棚田の不耕作地を利用した米づくりをスタート。現在、棚田15枚(約90a)を耕作中。平地と比べると田んぼの形はいびつで、機械が入るのがギリギリの場所で危険と隣合わせで作業を行っている。

● 田植えや稲刈りなどの体験や季節のイベントを開催

子どもも大人も楽しめる体験や季節のイベントを定期的に開催。

● 大吉村を大人の再教育の場に

1日1組限定で一般団体の受け入れを開始。学校の課外活動や会社の研修・社員旅行、企業のCSR活動などの場所として活用してもらう。

トウルーバファーム佐賀株式会社

鹿島市音成



「農業」を「農産業」に
収益性の高いビジネスとして展開

キッカケ

平成30年に会社を設立し、唐津市浜玉町でレモン栽培を、鹿島市七開地区で放牧事業を行っているトウルーバファーム佐賀。東京に本社を置く、トウルーバアグリของกลุ่ม会社で、農業者の高齢化や後継者不足が課題の中山間地域において、耕作放棄地や遊休農地を再生し、新たな付加価値を創造することをグループのミッションに掲げています。佐賀県では園芸と畜産業に参入。全国各地でのノウハウを生かしながら、農業をビジネスとして成り立たせる一歩を踏み出しています。



組織概要

平成15年創業のトウルーバグループホールディングス株式会社（東京都）は、金融機関向けの動産評価をはじめ、M&A、ビジネスマッチング、近年は第一次産業を中心とした事業分野に参入しています。なかでも動産評価においては、肉用牛の評価実績で国内トップを誇り、畜産農家への経営支援も行っていることから、グループの子会社としてトウルーバアグリ株式会社を設立。佐賀県をはじめ、大分県や宮崎県、北海道などを拠点に「農業」を「農産業」にすべくアグリビジネスを展開しています。耕作放棄地の開拓・整地から自社で行う徹底ぶり。



中山間地域での挑戦



つながり

「放牧の候補地を探しているときに、鹿島市から畜産業が盛んな七開地区を紹介していただきました」と藤野さん。鹿島市とは進出協定を結び、地元住民との交渉など土地取得を全面的にサポート。田舎であればあるほど、県外企業は「よそ者」として敬遠されがちですが、行政が間に入ることで地域とのやりとりがスムーズになります。「大事なのは地域住民の信頼を得ること。年に一度、七開地区の皆さんに向けて報告会も行っています」。じっくり時間をかけ、地域に根付くような気持ちで向き合うことが何よりも大切なのです。

耕す未来

全国トップクラスの品質を誇る佐賀県のブランド牛肉。「佐賀生まれの子牛を増やして貢献したい」と、母牛を100頭近くまで増やす予定。将来的には繁殖から放牧肥育事業まで行い、自社で一貫生産することを目指しています。「農業を産業として確立しなければ担い手は増えません。個人ではリスクが大きいことも、会社ならさまざまなチャレンジができ、雇用も生まれます」。耕作放棄地の開拓や整地も自社で行うのは、「すべての経験がノウハウとなり、他地域のコンサルティングにも活かせるから」。これからも農業を軸に、幅広い事業の展開につなげていきます。

藤野 太志さん



● 唐津市浜玉町の耕作放棄地を活用してレモンを栽培

当初は、大消費地の福岡に近い唐津市で畜産業を予定していたものの、放牧に必要な広さが確保できずに断念。取得した耕作放棄地（約1.5ha）では、国内自給率が低いレモン（品種：マイヤーレモン、リスボン）を栽培。東京都の飲食店と契約するなど都市圏を中心に出荷。

● 放牧繁殖事業で鹿島市の不耕作地を活用

放牧繁殖事業を行うため約19haの農地を取得し、うち約14haは開拓済み。令和4年2月に初めて牛を迎え入れ、現在45頭の母牛を管理。令和5年の初出荷から令和7年1月までに49頭を出荷。



03

株式会社九州アグリコール太良

太良町糸岐



この茶畑と
産地を守れたこと
農業を通じた
地域への貢献に

キッカケ

標高約300m、太良町糸岐地区の谷間に広々とした茶畑が広がっています。以前、県外の生産者が管理していた茶園を、離農のタイミングでそのまま引き継いだのが、平成28年設立の九州アグリコール太良です。長崎県佐世保市に本社を置く吉田海運のグループ会社で、主な事業は茶園および荒茶加工工場の運営。平成30年には、同地区にある太良みかん卸売販売選果場を行う株式会社カネタも吉田海運グループの一員になりました。農業への参入とともに、不耕作地の活用にも積極的に取り組んでいます。



組織概要

大正8年、長崎県佐世保市での国鉄の荷役から始まった吉田海運株式会社。創業時から大切にしているのが、安心・安全第一はもとより、人財を活用した一歩先へ行く、質の高い物流サービスへの挑戦です。「お客様をはじめとする皆様の需要や課題にお応えし、地域社会に貢献する」ことを使命に、現在は総合物流企業として、運送や倉庫の運営、製造・生産、整備など幅広い事業を展開しています。農業法人の九州アグリコール太良を設立したのは平成28年で、生産活動を通して地域の流通と雇用を促進。コア事業である物流部門を連携させることで、効率化を進めています。



中山間地域での挑戦



永石 弘之伸さん



つながり

離農は不耕作地が増加する大きな要因で、一旦荒れてしまうと元に戻るのに時間と労力がかかります。手入れが行き届いた茶園を荒らすことなく、茶葉栽培で農業参入を目指していた吉田海運とマッチングできたのは絶好のタイミングでした。嬉野の茶農家だった池田均さんを農場長に迎えるなど、地域と連携して雇用も創出。「全量買い取りの契約栽培で、JGAP（農業生産工程管理）認証取得など徹底した品質管理のもとお茶づくりに取り組んでいます」と池田さん。誰もが知るペットボトルのお茶に、自分達が育てた茶葉が使われていることが一番のやりがいです。

耕す未来

嬉野市より温暖な気候の太良町では、同じ条件で栽培した茶葉が10日ほど早く収穫できます。現在、太良町を中心に約26haの茶園を管理運営していますが、将来的には50haまで拡大する予定です。「吉田海運グループは、“農業には伸びしろがある。みかん以外の農産物もどんどんやっつけよう”と積極的です」と永石さん。不耕作地を活用した高級品種のぶどう栽培など、複合経営で収益向上を目指せるのは、企業としてのチャレンジがあっこそ。圃場は今後も広げる予定で、生産物の流通には吉田海運グループのネットワークを活用し、佐賀と全国を結びます。



● 大手飲料メーカーと専属契約した茶園を運営

大手飲料メーカーと契約し、全量買い取りを前提とした茶葉を生産。全国のスーパーや自動販売機などで提供される、ペットボトル飲料の原材料として使用されている。約10haの圃場からスタートし、現在は太良町以外もあわせて約26haを管理運営。

● 柑橘とぶどう栽培で稼げる農業を

太良みかんなど地元農産物を取り扱うカネタでは、中山間地の樹園地や不耕作地を活用して、シャインマスカットなど高級品種のぶどう栽培をスタート。県の支援制度を活用して、複合経営による収益向上を目指している。

池田 均さん



フィールドアップITN.株式会社

佐賀市三瀬



農業と福祉をマッチング
稼げる仕組みを目指して

キッカケ

佐賀市の最北端、脊振山系に位置する三瀬村。標高約400mに集落が点在し、福岡市中心部から車で約1時間とアクセスもよく、そば街道やキャンプ場、温泉など観光スポットも点在しています。その一方で山間に散在する農地は、農業従事者の高齢化や後継者不足などにより不耕作地が年々増加。地域課題を解決するきっかけになればと、フィールドアップITN.は国道263号沿いに農機具の買い取り販売店をオープン。敷地内では、農福連携事業として菌床しいたけの栽培も行っています。



組織概要

令和2年、福岡市で創業したフィールドアップITN.株式会社。「理念を通じ人格を学び心豊かに邁進する」を企業理念に、飲食業の運営、健康食品の販売、農機具の買い取り販売、新システムの構築、農福連携の取り組み、民泊業、フリースクール事業などに取り組んでいます。味噌ラーメン専門店の展開を軸に、時代のニーズや地域課題と向き合いながら事業を多角化。近年問題となっている「農業人口の減少」「障がい者の不安定な就業」に、令和3年から取り組んでいます。



中山間地域での挑戦



●使われていない農機具をリサイクル

農機具に関しては「処分に困っている」、「買い替えたいけど新品は買えない」など、農業をするうえで困っている人が多い。そんな悩みを解決するため買い取り販売店をオープン。

●農福連携でキノコを栽培

三瀬の自然水を利用して菌床しいたけをハウス内で栽培。作業を行うのは、福岡市内の就労継続支援B型事業所の利用者さん。スーパーなどと契約し、現在月に約1トンを出荷。

●農業体験ができるフリースクール事業

こどもたちの農業体験用として、三瀬の不耕作地だった場所で米や野菜を栽培。

西本 義治さん

つながり

自分たちが農業従事者となるには、知識も経験も農地もなかったことから、「地元農家の皆さんとの距離を近づけるために、農機具販売からスタートしました」と西本さん。農家の困り事を解消することで、地域との交流が自然と生まれ、農地の確保にもつながりました。「農地をお借りしている方には、こどもたちの農作業体験をお手伝いしていただくこともあります」。菌床しいたけは、最初こそ販売ルートに苦労したものの、販路開拓により一定した出荷量を確保。障がいを持つ利用者の特性にあった作業を行うことで、仕事へのやりがいにもつながっています。

耕す未来

現在は、兼業農家のスタッフを採用し、こどもたちの農業体験用として農地を管理。「三瀬には、不耕作地がまだまだたくさんあります。それらを活用して、米や野菜などこどもたちの体験用に農作物の量をもっと増やしていきたい」と西本さん。順調に出荷量を増やしてきた菌床しいたけは、施設的に最大生産量に達しています。障がい者の方にとって、働きやすい環境を整えられた結果だといえます。余力がある作業スタッフも多いことから、しいたけ栽培の作業経験がいかせる新規作物へのチャレンジを検討中です。



05

農業法人ちぎりファーム 基山町園部



“うちんもん”と“よそんもん”
それぞれの想いを地域になじませる

キッカケ

鳥栖筑紫野道路の園部ICから、車で3分ほどに位置する基山町園部。この地域で祖父母が柿農家を営み、こどもの頃の思い出は竹林や柿畑での自然遊びだったという生島さん。しかし、結婚・出産を機に地元を離れ、久しぶりに思い出の地に足を運んでみると、高齢のため管理ができず人が入れないほど荒れ果てていました。不耕作地は年々増加し、「このままではふるさとが無くなってしまふ!」という危機感と、「どうにかしなければ!」という使命感に突き動かされ、地域づくり活動をスタート。令和4年には、新規就農者となって米づくりを始めました。



組織概要

「園部に人を呼び込みたい」と考えた生島さんは、地域活性化団体Tigiriを発足し、令和元年にマルシェイベントを開催。JR九州ウォーキングにあわせた企画で、地域の方たちと協力しながら令和4年までに計6回実施。この活動をきっかけに、同じ志を持つ方たちとの出会いが広がり、地域を持続的に守るため農業者になることを決意。令和4年、新規就農と同時に「株式会社ちぎりファーム」の取締役園主に就任しました。後継者がいない農地を中心に、農業や化学肥料に頼らない自然の循環から生まれる、“おいしい”を大切にしたい農業を続けています。



中山間地域での挑戦



● 農産物の生産から営業、販売まで
かつて天領米として高い品質を誇っていた園部の米づくり。農業に頼らない方法で栽培した米は「ちぎり米」としてブランド化し、畑では柿や梅などの果樹をはじめ、少量多品目で野菜を栽培。社員への褒賞として「ちぎり米」を採用してもらえるよう、企業相手の営業にも精力的。

元牛舎を交流拠点に 地域のにぎわいづくり

畜産で使われていた牛舎をリノベーションし、イベントやこどもたちの居場所づくりとして活用できる交流拠点に。環境と食、地域振興などをテーマにした、KBC（九州朝日放送）の「アサデス。ふぁーむ」の番組企画にも協力。

生島 陽子さん



つながり

ちぎりファームの代表を務めるのは、地域再生プロジェクトを手掛ける不動産会社の経営者。第三者の視点で、ビジネスとしての考えを地域に落とし込むことが必要だと考え、「彼のノウハウがあったからこそ、ファームを立ち上げられた」と生島さん。その一方で、「地域には米づくりの先輩がたくさんいて、いつも教えてもらっています」。地域の協力と理解があってこそ、令和7年には5.9haの田んぼを10haにまで拡大予定。それぞれに熱い想いを持つ、“うちんもん”と“よそんもん”をつなげて調整することも生島さんの大切な役割です。

耕す未来

持続可能な地域づくりに貢献する次のステップとして、農業を中核にレストランやカフェ、キャンプ場などさまざまな事業展開が考えられるなか、「夢物語かもしれませんが、園部ICから山へ向かうエリアを、自然と共存できるオーガニックエリアにしたい」と生島さん。例えば、里山保全のために伐採した竹をチップにして田んぼの肥料として循環させたり、こどもたちが川で遊べるエリアを作ったり、「地域内のいろんな人や団体と連携して、日常では味わえないような体験ができたら面白いはず」と夢は膨らみます。

06

川内地区棚田保存会

武雄市川内



棚田を楽しむ、
音楽を楽しむ、
豊かな時間が紡がれる場所。

キッカケ

佐賀県のほぼ中央にそびえる八幡岳。その南麓、武雄市北部の標高200～300mに若木町川内地区の棚田が広がっています。近くには樹齢100年を超える山桜があり、雨上がりの朝には神秘的な雲海が広がるなど自然を楽しめる一方で、棚田の担い手の高齢化や後継者不足で不耕作地が増加。農地保全や地域活性化の取り組みとして、平成30年から音楽祭や棚田オーナー制度などに取り組んでいます。



組織概要

川内地区のシンボルでもある山桜は、地名にちなんで「ジラカンス（白観巢）桜」と呼ばれ、地域の人々に親しまれてきました。四方に広がる見事な枝ぶりと、ため池の水面に映る姿が美しく、開花時期には県外など地域外からも花見客が訪れます。そんなジラカンス桜を守るために、地元有志で保存会を発足。環境を整備するだけでなく、開花時期のライトアップや写真コンテストを開催するなど、精力的に活動してきました。この保存会が母体となって結成されたのが川内地区棚田保存会。40代から70代まで28名が所属しています。



中山間地域での挑戦



つながり

棚田オーナーは武雄市外がほとんどで、「ありがたいことに、受け入れの枠はすでにいっぱい。それでも希望者がいらっしゃるのでキャンセル待ちの状態です」と向井さん。音楽祭では、第1回から出演するシンガー・ソングライターのハモノユリナさんが、「若木町は第2のふるさと」だと語り、川古の大楠をイメージしたオリジナルソング「大楠の樹」を制作。棚田の保全活動によって新しい出会いが生まれ、その交流が地域の元気につながっています。

耕す未来

会員に負担をかけず、無理な活動をしていないことが取り組みを続けられるポイント。川内の棚田をプラットフォームに、市町など外部団体がイベントを主催してくれるように仕掛けていきたい。音楽祭の会場になっている天満宮は、昔から地域の人たちが集う場所であり、娯楽を楽しむ場所。天満宮を人であふれさせるようなイベントを企画し、棚田を元気にして、若木を元気にして、武雄を元気にしたい！



● 満員御礼のタナディアンロッキー（棚田オーナー制度）

八幡岳の山容がカナダのロッキー山脈を彷彿させることから、川内の棚田を耕作する人々を“タナディアンロッキー”と命名。現在、企業や個人など22組が約70aの棚田オーナーとして契約。

● 収穫の感謝を分かちあう音楽祭を開催

地区内の天満宮を会場に、平成30年から「棚田人音楽祭（タナディアンミュージックフェスティバル）」を開催。県内外のミュージシャンが出演するライブのほか、棚田の新米や特産品などを販売。

● ジラカンス桜の保全活動

桜のライトアップや写真コンテストなどを実施。



向井 健作さん

川古集落営農組合

武雄市川古

ふるさとを守る
若いチカラの種
未来に向けて育てていく

キッカケ

武雄市若木町の4集落(川古山中・上宿・血宿・下村)で構成された川古集落営農組合。農家の高齢化や後継者不足で不耕作地が年々増加するなか、ふるさとの農地や景観を維持することが大きな課題に。「いつまで営農できるのか?」、「非農家も農地を守るために協力してくれるのか?」などの悩みや不安を抱えるなか、同組合では若手が地域農業に参画しやすい仕組みづくりを令和2年から段階的に進めています。



組織概要

川古集落営農組合が、新しい担い手として注目したのは地元消防団。災害時にリーダーシップを発揮する存在で、地域コミュニティの要でもあります。団員は会社員や自営業などさまざまな仕事を持った人々。地域に密着して住民の安全を守るのはもちろん、こどもたちの体験学習を目的とした小学校の学習田では作業のお手伝いもしています。そんな消防団に「地域の農地を維持するため、農作業に協力できるか?」とアンケートをしたところ、35名中9名の協力が得られました。



中山間地域での挑戦



● 座談会で地域の課題を棚卸し

活動のキックオフは、4集落から農家と非農家104名が出席した座談会。将来の不安や悩みを洗い出し、農地を守るための課題を可視化。

● 「Z-GIS」を使って みんなで情報を共有

圃場と電子地図をひもづける、営農管理システム「Z-GIS」を導入。組合員同士が、圃場の位置や営農情報などをスマホで共有。

● 地元消防団の有志が オペレーターとして農作業に協力

田植えや稲刈り、大豆の播種などは、消防団所属の若手がオペレーターとして協力。参加しやすいように作業内容や日当を明確化。

つながり

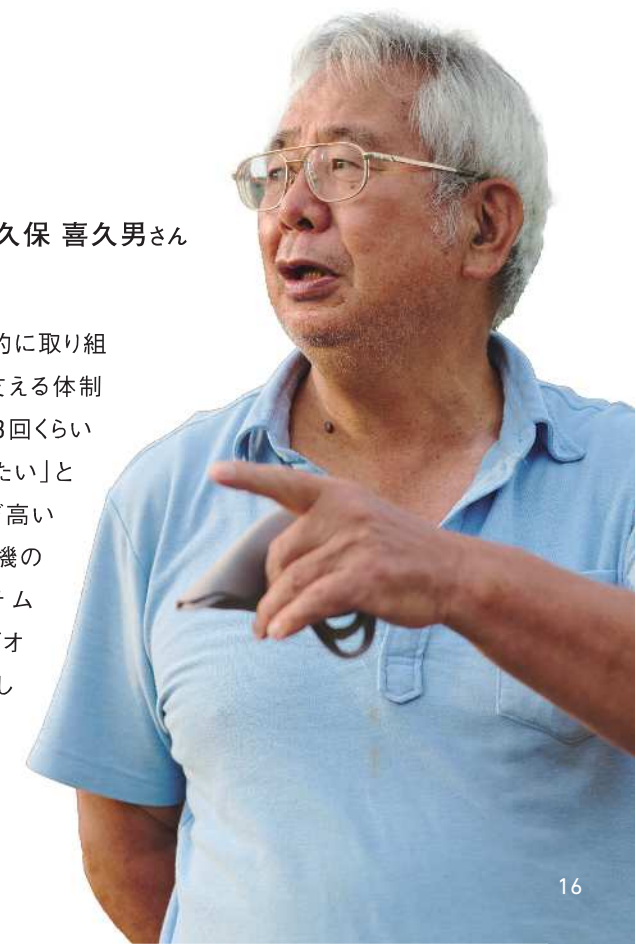
取り組みを進めていくなかで、意外な助っ人も生まれました。「65歳で定年したのをきっかけに、オペレーターとして協力してくれる人達が出てきたんです」と久保さん。若手だけではなく経験豊かな協力者も増え、人手に困ることなく作業を進めることができました。「ただし5年後、10年後を考えると、若手の育成は大事なこと。『誰かがしてくれる』、ではなく『若木の土地は自分たちが守る!』という意識を持ってほしい」と切に願っています。

耕す未来

地域課題の発見と目標設定で、段階的に取り組んできたものの、「みんな」で地域を支える体制づくりを進めていきたいからこそ、年に3回くらいは4集落が集まって意見交換を行いたい」と久保さん。また、スマート農業に関心が高い若手が多いので、トラクターや田植え機の研修だけでなく、営農管理システム「Z-GIS」や栽培管理システム「ザルビオ※」などIT技術を活用する講習も検討しています。

※AI分析で、圃場ごとに最適な作業時期を提案するなど初心者から上級者までサポート

久保 喜久男さん



08

鍋野集落協定

嬉野市鍋野

農家でも、農家じゃなくても
ふるさとを守りたい
気持ちは同じ

キッカケ

嬉野市塩田町の山間部に位置する鍋野集落。住民の高齢化が進み、地域の農地・水路・農道をどのように次世代に引き継いでいくかが大きな課題に。農業者だけでは、将来的に農業生産が困難になると考え、平成13年に非農業者を加えた集落全戸で鍋野集落協定を締結。当時の世帯数は50戸ほどで、一部に休耕田は見られたものの、ほとんどの世帯で農業をしていました。しかし、現在（令和6年度）は世帯数が36戸、その半数以上が非農業者となり、協定農用地の減少が進んでいます。



組織概要

鍋野集落では、その昔、清流を利用した手漉き和紙づくりが行われていました。全盛期には多くの世帯が和紙づくりに携わっていましたが、時代とともに需要が減少し、昭和40年代に途絶えてしまいます。地域の伝統文化を次世代に残そうと、平成12年に「鍋野手漉和紙保存会」が発足。集落の中心に工房を構え、和紙づくりを再開すると、現在は嬉野市内の小中学校の卒業証書などに採用されています。昔ながらの伝統的な製法を間近で見られるとあって、見学や体験の希望者が地域外から訪れています。



中山間地域での挑戦



● 農家だけでなく、集落ぐるみで農地を守る

中山間地域における農地保全は、農業者を主体にしがち。鍋野集落では農業者だけでなく、非農業者を巻き込んで集落一体で取り組む体制を整備。

● スムーズな役員交代で、なり手不足を解決

自治会をはじめ、地域コミュニティの活動では、役員のなり手不足が深刻化。鍋野集落協定では、役員交代がスムーズに行われるように、平成22年以降、「区長」を退任した後は「協定の代表」に、「生産組合長」を退任した後は「協定の役員」にスライドして就任。

野中 弘明さん

つながり

ほとんどの世帯が、田んぼや畑など何かしらの農地を保有しており、休耕田は自己保全管理が基本です。今は作り手がいなくても、いつでも耕作を再開できるように、草刈りや田起こしを丁寧に行う住民もいます。農業者も、非農業者も「先祖が残してくれた土地を守りたい」という気持ちは同じ。集落ぐるみの取り組みは、自分たちの手でふるさとを守る!という一体感にもつながっています。「中山間地の交付金は、農地に関するだけでなく、公民館の補修など集落のためにも利用します」と野中さん。農業だけでなく、地域の未来を見据えた取り組みを大切にしています。

耕す未来

協定を締結して、令和7年度で6期目（1期5年）に突入。農地の維持管理は、自己保全管理が基本だけれども、高齢化にともない今以上に不耕作地が増える可能性が高まります。「手入れが行き届かず雑草が生い茂ると、イノシシの棲み家にもなりやすいので、鳥獣被害対策の視点からも共同作業による維持管理を検討していきたい」と野中さん。また、稲作以外に集落の土壌に適した作物があれば、休耕田の活用につなげていきたいと考えています。



株式会社エヴァ

伊万里市滝野



ふるさとを離れて深まる郷土愛
地域貢献の一翼を担う存在に

キッカケ

標高250mの深い山の谷間に棚田が広がる、伊万里市東山代町の滝野地区。地元生産者で構成される滝野棚田の会と株式会社エヴァは、令和6年に棚田ボランティア協定を締結しました。エヴァの会長・川原司さんと棚田の会に所属する川原育男さんは兄弟で、兄の司さんは20代の頃に地元を離れ、弟の育男さんが家業を承継。司さんは個人的に田植えや稲刈りを手伝ってきたものの、地域社会の一員である企業としてもボランティア活動をスタート。ふるさとの棚田保全や地域活性化につながるため、棚田米やレモンの収穫支援・販売支援を行っています。



組織概要

平成11年創業の株式会社エヴァは、「健康で生きがいのある長寿社会の形成」を理念に掲げ、介護・福祉用具のレンタルや販売を中心に、手すりやスロープの取り付けなど住宅リフォームも手掛ける企業です。福岡市内に本社を構え、伊万里市や佐世保市など北部九州に6つの拠点をもち、幅広いサポートを行っています。創業者で現在は会長を務める川原司さんは、持続可能な介護を支援する活動や地域活性化事業など多方面で活躍しています。



中山間地域での挑戦



● 棚田米の収穫支援

株式会社エヴァ（伊万里市）の社員と家族のみなさんが稲刈り作業に参加。棚田米のおにぎりやイノシシ肉のバーベキューの振る舞いも大好評。

● 休耕田で栽培されたレモンの収穫支援

レモンは、棚田米と並んで滝野地区の特産品の一つ。休耕田を活用してレモンを栽培し、その収穫作業を支援。

● 休耕田をコスモス畑に

写真映える花スポットとして、休耕田にコスモスを植栽。車で約5分の場所には、県内外から見物客が訪れる川内野棚田のコキア畑もあり、近隣地域一体で楽しんでもらいたい。



川原 司さん

つながり

ボランティア活動と同時期に、兄弟で経営する「はぐみファーム株式会社」を設立。滝野の棚田米の販売と、棚田米を米粉に加工して販売する会社で、アルファ化した米粉を製造しています。アルファ化とはでん粉が糊化した状態ことで、消化が良く、水やお湯を加えるだけで食べられます。火が使えない災害時の非常食としても活用されるなか、「介護食の開発につなげていきたい」と司さん。粘り気の強さは、お菓子作りやパン作りにもぴったりで、グルテンフリースイーツの幅を広げる情報発信や商品開発にも取り組んでいます。

耕す未来

経営者の視点で、地域活性化につながる構想も次々に生まれています。例えば、古民家をリノベーションした宿泊施設。食材だけを用意する無人宿で、泊まるところがあれば滝野の自然をより自由に満喫してもらえるはずです。「地元の歴史を紹介する場所もつくりたい」と司さん。「残りの人生を考えたとき、知りたくなるのが自分のルーツであり、ふるさとの歴史なんです」。景色が変わっていくふるさとのために、自分に何ができるかを考え、行動する日々はこれからが本番です。

金崎建設株式会社

伊万里市川内野



当事者の視点でボランティア
地域の困りごとにも対応

キッカケ

伊万里市の西部、国見山系の標高300mに位置する川内野棚田。農家の高齢化が進むなか、地元生産者で構成される川内野COME倶楽部と金崎建設株式会社は、令和元年に棚田ボランティア協定を締結しました。川内野地区では、佐賀大学との協働でイノシシ除けの網をイルミネーションで飾り、棚田で音楽コンサートを開くイノピカプロジェクトを実施。地域外の人たちも巻き込みながら、交流人口を増やす取り組みを積極的に行っています。



組織概要

昭和24年、伊万里市で創業した金崎建設。伊万里市を中心に佐賀県全域、長崎県、さらには福岡県で総合建設業を手掛ける企業です。「地域密着型工事」を目指し、道路や河川、用地造成などの土木分野をはじめ、一般住宅から公共施設まで建築分野で活躍。地元企業として持続可能な地域づくりを担うため、棚田ボランティアや伊万里湾のカブトガニ産卵地の清掃活動を行うなど、社員一人ひとりが自主的にボランティア活動に取り組んでいます。



中山間地域での挑戦



左：幸松 伝司さん

つながり

ボランティア活動の中心を担う、金崎建設の山口和勇さんは川内野地区出身。自らも小規模ながら棚田を耕作し、地域の課題に直面しているからこそ建設業の強みを生かしたボランティアを行っています。「現在は草刈り作業がメインですが、以前はイルミネーションを設置する作業もサポートしていました」と山口さん。第1回のイノピカプロジェクトから支援していることが評価され、農水省より「つなぐ棚田遺産」感謝状が送られました。

耕す未来

地域の担い手として関係人口を取り込むことは、課題解決の期待につながります。外部の人間を拒む閉鎖的な地域もありますが、川内野地区はとても柔軟。「イノシシの捕獲をしていた地元の人間が高齢で難しくなり、棚田ボランティアで顔見知りになった方に免許取得をお願いしたところ、“地域のためになるなら”と快諾してくれました。かなり珍しいことだと思います」と幸松伝司さん。草刈り作業もイノシシの捕獲も、中山間地域ならではの困りごと。当事者の視点になったボランティア活動に今後も取り組んでいきます。

山口 和勇さん



●イノピカプロジェクトにあわせて草刈り作業

イノシシの侵入を防ぐ網にイルミネーションを設置する前段階として、地域住民と一緒に草刈り作業を実施。イルミネーションの点灯期間は、山の日(8月11日)～12月31日。

●イノピカコンサートで設備支援

10月に開催されるコンサートは、イルミネーションと音楽を星空の下で楽しむ野外イベント。当日使用する発電機や仮設トイレなどの設置を担当。

●地元からの依頼で、わな猟免許を取得

地元住民から依頼され、金崎建設の社員(1名)が「わな猟免許」を取得。農作物に被害をおよぼすイノシシの捕獲が目的。



NPO法人佐賀学生スーパーネット

佐賀市三瀬

みんなに知ってほしい
中山間地域のこと、そして未来

キッカケ

少子高齢化が進み、後継者不足の中山間地域の課題に、大学生の視点で関わっているNPO法人佐賀学生スーパーネット。農業分野のボランティア活動として、豊かな自然に囲まれた佐賀市三瀬村で竹林伐採や農業支援などを行っています。なぜ山の竹を伐採しなければならないのか、どうすれば伐採した竹を資源として活用できるのか。現地に足を運ぶことで、つきつけられた課題と向き合い、考えながらアクションを起こしていく学生たち。その活動は、新しいメンバーにバトンタッチしながら20年以上続いています。



組織概要

佐賀大学生を中心に活動しているNPO法人佐賀学生スーパーネット。令和6年度の部員数は農学部を中心に28名。平成15年の発足で、主に「農業・環境・教育」の3分野を中心にボランティア活動をしています。ふれあい農業事業部では、中山間地域で竹林伐採などを実施。PBR（ペットボトルリサイクル）事業部では、回収したペットボトルキャップを世界の子どもたちのワクチン費用として寄付。キャリア教育事業部では、佐賀市内の小中学生の教育支援を行い、公民館で様々な世代が交流できるイベントを企画・運営しています。



中山間地域での挑戦



● 環境保全のために竹林を伐採

竹は根を浅くはり、放置竹林では地滑りを起こしやすいので土砂災害を防ぐために適正な管理が必要。繁殖力が強いいため年に数回、学生たちが三瀬村の竹林に入って伐採作業を実施。令和6年度は、県の森林指導員を招いたうえで、龍谷中学校の生徒たちと伐採体験を行った。

● 伐採した竹の活用で
佐賀大学祭に初出店

伐採した竹を活用するため、竹細工ワークショップを佐賀大学祭に初出店。一つひとつ手づくりした竹のパーツを組み立てて、スマホスタンドなどを制作。楽しい体験を通して、学生や子どもたちに中山間地域の竹林の状況について周知。

つながり

三瀬村での竹林伐採は、学生と地域が関わるフィールドワークのようなもの。「重機が入れない竹林では、人が手作業するしかなく、かなりの力仕事になります」。「高齢の方だと伐採した竹を運搬するのが難しい」。「中山間地域」や「耕作放棄地」という言葉は知っていても、現地に足を運んだからこそ実感できることがたくさんあります。学生たちの体験の場になればと、竹林を提供しているのは農家カフェを営む小野寺さん夫妻。「山や自然を楽しむ時間も作ってほしい。やりたいことを提案してもらったら、できるだけサポートしたい」と、これまでもこれからも応援を続けます。

耕す未来

団体としての活動は20年を超えるものの、大学生だからこそ代表者やメンバーの顔触れが年々変わり、活動内容も変わります。「令和6年度は、中学生と一緒に伐採作業をしたり、大学祭に出店したり、周りを巻き込む活動が多かったです」。中山間地域の課題や竹を伐採することの大切さを、少しでも身近なものとして感じてもらうと参加型のイベントやワークショップを企画。「大学祭に出店するノウハウもできました。今後も外部の人を巻き込みながら、中山間地域のことをたくさんの人に知ってもらえるような活動を」と後輩たちにエールを送ります。

大坪 明日香さん



